

momiji

四つ足で森を徘徊していたら、てのひらが落ちていた。

妖怪の山は一面の紅葉であって、燃えさかるように赤かったが、そのときわたしはけもの体ていをしていたので、鼻がよくきいた。だから、見た目では小さなもみじのようなそのてのひらを、本当のてのひらだと気がついたのだった。鉄の錆びた匂いがつんと尖っていて本当に美味しそうな肉片だった。まだ切られたばかりでそれほど経っていない若い感じのする肉で、手首のあたりの傷口からはまだ赤い薫香が流れ出していた。みるみるうちにぺちゃんこになってしまいそうでひどく惜しかった。

わたしはそれを口中に収めようとした。鮮度が落ちてしまうより先に喰らうてしまうのが狼として、肉食のけものとして、そのてのひらに果たすべき役割と想うたのである。そうして鼻先をすり寄せた時に、そのゆびの形に見覚えがあることに気がついた。それからその中指の横ちよに付いた黒インキすの酸すい匂いも。

届けにいかなくちゃ、いけない。

わたしはてのひらの肉厚のところを選んでくわえて、それが来た方をとことこ戻っていった。鼻をときどきうごめかして、その出所を探りながらとことこリズムを付けて

歩いて行った。

山はあくまでも美しかった。手のひらを含めて、全て在るべきものはいつでも美しく在るようだった。

てのひらをくわえていなければ、ふんふんと鼻歌を歌いたくなるほどに、いい天気だった。木漏れ日が木々の間から差しきて、毛皮を心地よく温めた。吹き抜けてくる風はどこまでも爽やかに、手のひらの血なまぐさい匂いを吹き飛ばしてくれていた。遠くで鳥たちが呼び合っていた。元気だった。すこやかだった。

うっかり食べてしまっただけなので、なるだけ血は舐めないようにした。それでも時々油断して鼻先をかすめてくる猛々しい匂いに、だらだらよだれがこぼれていった。つめたいのひらに、唾液がしたたり落ちていくのが舐めなくてもわかった。しとしと雨みたいに地面を濡らしているのを聞こえないふりをして、おなかもぎゆるぎゆる言っているのをなかったことにした。

今にも崩れそうなぼろ屋が、匂いの元だった。てのひらとまったく同じ血のおいがそこから立ちこめていた。わたしは一度地面に手のひらを置いて、それからヒトガタに

變化した。白い尻尾と耳は隠さないが、二本足で歩けるように変わった。森を歩くときにはけものの方が楽なのだが、こうしなければ言葉が話せないのが困ったところだった。ふらふらとてのひらを指先でつまみつつ、改めて検分する。桜貝のようだった爪も、ほっそりとした指先も、インキの深い黒も、どう見てもあの方のものとしか思えない。人間であれば、片手ひとつ切り落とされただけで大事だが、残念なことにわたしたちは天狗である。わたしのような白狼天狗であればまだしも、鴉天狗がこのようなことで何か重大事件になるとも思えない。せいぜい、天狗らしく新聞の記事にして何か悪い冗談を言つて抱腹絶倒の上、腹直筋を痛くするのがいいところだろう。妖怪というのは、何もかもを冗談や新聞のネタにしてしまう生き物なのだ。文だつてそれは変わりなく、ネタがなければ自分で事件を起こしてしまえばいいと常日頃から言つて、率先して文々。新聞に掲載している。

「文さま、おられるのでしょうか」

声を掛けてから、朽ちた引き戸をゆっくり引こうとして、取つてがもげてしまったのに閉口した。仕方なしにはずすと蹴るとあつけなく穴が開いて、けれども足首ごとはま

り込んでしまつて、食いついた木のとげに袴の裾が引っかかり、抜くのが大変だった。苔むした材木のそこかしこには蜘蛛の巣がかかり、あるいは菌類が胞子を出して少しずつ浸食していくようだった。奥へ踏み込むと床板も剥がれ、あるいは腐り、まともに歩けるのはごく限られたルートだけのようだった。

その最奥部、じつとりと湿った部屋の中、主はたたずんでいた。机の上にはギロチンのような裁断機と、散らばった原稿用紙があつた。どちらも噴き出した赤い血に染まっていた。とくに、机の上にあつた紙片は完全な紅に染まって、ぼたぼたと血のしずくをまきちらしていた。

「やあ、椀」

と、文は手首から先がない右手を挙げた。ぐちゃぐちゃになっている切断面からうっすらと骨が見えた。

「どうしたんですか、その手」

「裁断機の調子を試していたんです」

文は白々と嘘をついた。

「またそういうことを」

それならば、あんなに遠くへ飛ぶわけがない。切り落とした後で思い切り遠くへほうりなげたのでもないかぎり、あんなところに落ちているはずがないのだ。

嘘を咎められたことに、文は苛立ちを隠せないようだった。ただ口が動くままに話していた。

「だって、このままじゃメ切りに間に合わないから。なんてそんなのは嘘で、書きたくないなら書かなきゃいいのに。どうしてそこまでしてアピールするんだろう？　というような気持ちもあるのです。そもそも誰に向けて記事を書いてるんでしょうね？　誰も読まないのに。多分自分に向けて書いてる。だって誰も書けなんて言ってはくれないんですから、せめて自分だけでも発破かけて読んであげなきゃダメじゃないですか。こんなの誰も読みたいくはないのにね。そういう言い訳をしながら書き続けるのはもううんざりなんですよ。いやいや、そうでもなくて結局ただ単に痛いのが好きなんですよ。言ってみれば生きてる感じなのかな。いや、それも陳腐な回答過ぎるな。単に暇なんで暇つぶししてるだけなのかもしれない。多分そういうことなんでしょう。でも原稿を書く気

持ちにだけはなれないんですから不思議なものですよねあはは」

そこで息継ぎをして、あはは、ともう一度わざとらしい声を立てて笑った。

「書いてもらわないと困るのですが」

わたしはどう聞けばよいものやら分からないので、ただ欲するところを求めた。世の中に絶望したかのような言葉の内容とはうらはらに文が取り乱してさえ見えないのはいつも通りのことで、やはり書く言葉と同様に話す言葉に意味などないのだから、素直に受け答えするつもりもなかった。

文はわたしの話した言葉の語尾に何か価値を見いだしたかのような、嬉しげな笑顔を浮かべてこう言った。

「ソウシナイ方ガいいノですが」

「バートルビーですか」

「おや、知っているのですか」

「この間、本人が幻想入りしていました。相変わらず陰気に事務所の奥でうずくまって同じ言葉を繰り返すだけでしたがね。白鯨と一緒に来たようです」

「白つながらりで覚えているのですか。それはうらやましいこと。一緒に行ったら記念写真ぐらいは撮ってあげたのに」

「そうしない方がいいのですが」

わたしはそう言って微笑する。それから、てのひらを差し出した。

「使える右手を切るのはいけないことだと思います。どうせ痛みを感じるためだけなら、役に立たない方を切った方がいい」

「切るなどは言わないのですね」

「そうしない方がいいのですが」

「その冗談はあまり面白くありませんね」

「それは失敬」

特に深い意味のない言葉だったのでわたしは謝った。

「何をしたら書いてくれますか」

「何でしょうね。食べてくれたらよいのかもかもしれません。誰かに食べられかけたら、その間ぐらいは必死になれるかも。ダイニングメッセージを書くぐらいのことはするでし

よう」

「では、文さまの左手をかじらせて下さい」

「右手をもう持っているじゃないですか。それを舐めるのはいけないのですか」

「これは利き手だから貴女とつなげないといけない。書くための手だから。書いて全てを冗談にしてしまうための手なんだから」

「わたしはもう、書きたくないのです。永遠に不着の郵便配達人と同じように何処にも届かない言葉を紡ぎ続けることに飽きたのです。だから右手ではない方がいい」

「そうしない方がいいのですか？」

「そうしない方がいいのです」

「そうしたくないのでしょうか？」

「そうしない方がいいのです」

議論にすらならないような堂々巡りだった。お互いの言葉が聞こえているのかさえ怪しいような。

わたしは特に事実だけを述べた。

「誰もが書けと言うでしょう。文々。新聞が無いと幻想郷の日常は面白くないんです」

「何を言っているのです。今日日、だれも新聞なんて読みやしませんよ。文字を追うより女の子のケツを追っかけてる方が楽しいんだから」

「まあそうかもしれないですね。でもとにかく書かなくちゃだめです。そういうキャラ設定なんですから」

「何ですって？」

「自分の存在理由が書くこと以外に見つけられない。自分でこの間酔っぱらって言っただけです。自らの言葉は自らを規定する。なりたいと思うような自分にしかなれないんです。つまらない文章を書きたいと思ってるわけじゃないんですか？ 文さまはつまらないと思われるのが怖くて自分から面白さというものを投げ出しているだけだ」

「……あれは戯れ言です。幻想入りしました」

「幻想こそが真実となるのだから、いいんじゃないんですか」

「そんなねえ、いつまでもオナニーみたいなこと言っただけで恥ずかしくありませんか。誰

も読まない文章の存在価値なんてチラシの裏以下ですよ。だって何の役にも立たないんだからどうしてこうなったのか私の方が教えて欲しいぐらいだ。何処にも届かない独り言の文章を大量に印刷してコストかけて配布するなんてのはいい加減飽きたんですよ。これから先はもつと有意義な遊びをして暇をつぶすことにしようと思っんです。例えば右手を裁断機で切り落として、遠くに投げ飛ばして一体どれぐらいで生えてくるか、っていう実地耐久試験みたいな、もうちょつと世の中の為になるようなことをやろうと思っんです」

「別にそれは左手でも出来るでしょうし、その実験が何かの役に立つかどうかは私には疑問です。とにかくいいから書いて下さい。右手の傷口がひからびるとくつつきにくくなるんだから」

「いいから、しゃぶっててくださいよ。そうしてそのまんま飲み込んでしまったらいいのに」

「血の味がするので我慢できません。左手をよこせ」

「本音が出ましたね、人食い狼。やるもんですか」

身体を陽炎のように揺らめかせながら、文は立ち上がった。ごぼりと傷口から血があふれる。

ぐる、と喉の奥が鳴った。

食欲がかき立てられる血のにおい。甘い。薫り高い鉄の匂い。新鮮な赤み。

「いいからその左手をよこせ。わたしは肉が食いたいんだ」

「その右手を喰えばいいでしょう」

「いやです。これを食べたなら文さまが書けなくなってしまふ」

「そんなことは構やしません」

「文さまが書けなくなるのは嫌だ。わたしが嫌だ」

「私が望んでいないことをどうして椛が望むのです。そんなのはただの読者のエゴじゃないですか」

「だって、そうしなくちゃいけないんです」

「どうして、そうでなくちゃいけないんです？」

「どうしても、そうでなくちゃいけないと信じるからです」

理屈は、わたしの中になかった。

正直な話、わたしはものを書いていてという文が好きだし、その書いているものの中身なんて構わないけれど、文が書いているというその事実だけで何とはなしに救われるような気がする。それはもう、理屈ではなかった。

文には分からないようだった。それはそうだろう。

「気のせいでしよう。そうしない方がいいのです。」

「何をしない方がいいのですか？」

「何でしょうね？」

「自分で分かっていらっしやらない。同じようにわたしにも分からないのです。何をすべきで、何をすべきでないか。ただ、わたしは文さまのことを見守っていたいだけです」

観察者、監視者。それが白狼天狗の職務である。千里を見通す程度の能力を持つ。

「貴女を見続けることが私の使命です。貴女を読み続けることが私の役割なのです」

「煩い、煩い、煩い。どうして私を放っておいてくれないのですか。私なぞお前に喰われてしまえばいいのに」

「食べませんよ」

「それなら私がお前を喰う」

言うなり、文は勢いよく立ち上がる。なんだかわたしはそれを予想していたような気がする。いや、正しい言い方をするならば『読んでいた』のだろう。

これは、王道展開だ。

「*sooner rather than later*」
そうしない方がいい。けれど、仕方がない。そのように読まれてしまったのだから、それを裏切るわけにはいくまい。

「頂きます」

大きく文の口が裂けた。顎の関節が崩壊してしまったように顔半分が口腔の肉色で覆われる。みしりと木の裂けるような音が鳴った。白い健康な歯がきらめいている。唾液に濡れている。

肉にかぶりつき引き裂くための強靱な口の中に、わたしはさつき拾ったものを投げ込んだ。

赤色。血の色。もみじ色の、少女の手のひら。

カエサルのはカエサルに。

「食べたなら、また生えてくるでしょう。妖怪なんて単純な生き物なんですから」

「……美味しくない」

それでも、もぐもぐと未練がましく咀嚼していた。吐き出しはしなかった。それを見てわたしは少し安堵した。

そうして、文は微笑した。そしてわたしの顎を取って自分の方へ向けた。

「隙アリ」

「あ」

二口目はわたしだった。大きく開けられた口の中にわたしの唇は吸い込まれていた。むしゃぶりつかれて、柔らかさがほんの一瞬、そしてそのすぐ後に歯の堅さがぶつかった。強く強く噛まれて血が噴き出した。痛みが鈍く脳に散った。鉄の色をしていた。

「お腹が空くのです」

下唇を半分喰い千切ったところで、文は言った。わたしは何も答えなかった。答えようにもうまく話せなかっただろう。破裂音を唇なしで言えるのは、せいぜい腹話術師ぐ

らいだ。

特に憎む気持ちはなかった。いつものことと言えばそうだった。妖怪は半身を千切られたところで死にはしない。天狗のように長寿であればなおのことだ。弾幕ごっこで何度撃ち抜かれてもしばらくじっとして美味しいものを食べていれば治るのだ。痛いのは確かだけれど。

それよりは、書いていて欲しいように思った。そうやって少しでも書くことの足しになるのなら別段喰われようが裂かれようがどうでもいいように思った。

「美味しい」

そう言って、文はまた笑った。わたしは小さくうなずいた。そうして無言で机の上の原稿用紙を指さした。文は小さくかぶりをふった。

「口うるさい駄犬」

それからまたわたしの首へ顔を寄せた。破けた唇からしたたり落ちた血をざらついた舌先で舐める感触。くすぐったくてわたしは息だけで笑った。

「何が可笑しいのです」

わたしが愉快だと、文は嫌なのだろう。不機嫌そうに言われた。わたしは一生懸命笑うのをこらえた。首筋に力が入った。

「堅い」

気に入らない様子でそう言うと、文はがぶりと歯を立てた。舌の唾液がぬめり、肌の上をすべる。皮膚の薄いところ、弾力をさらに強い力で押さえ込んで、そのうちにふつり、皮を破って、痛く冷たいものが侵入してくる。それから堅いものがゆっくりと食い込んでいくのが分かった。わたしはその感触から気をそらすために、外の光景を見ていた。赤い赤い夕日だった。秋の日だった。少し蒸すぐらいの日差しだった。風は吹いていなかった。代わりに少し興奮したような、ふう、ふうというような文の息が聞こえるのだった。

「おまえは、屍肉のように軟らかくないといけません」

口を離れた文が言った。頬までべったりと血で汚れていた。わたしはそっと手を伸ばしてその汚れを拭いてやりたかった。けれど文はそのわたしの手を打った。あつけのない冷たさだった。

「お腹を壊してしまつたら書けませんよ」

わたしはそう言われると身体の力を抜くしかなかった。気を少し抜いたせいで、目の前が暗くなった。唇と首からだらだらとこぼれる血が抜けて貧血になったのだらう。倒れないようにゆっくりと床に座った。それでもまだ姿勢を保つことが出来なくて仰向けに転がった。

「情けない」

なんと言われようが床に転がって尻尾を丸めて腹を見せるしかなかった。それが犬の習性だ。狼であろうが、飼い慣らされてしまえば犬と変わらない。別段、かき立てられるべき感情は起こらなかった。

文は覆い被さってきた。ゆっくりと服を脱がそうとしていた。帯をほどき、袴のひもを解き、合わせをくつろげて、ゆるめていく。左手一本で器用なものだった。

何が必要なことなのかよく分からなかった。どうでもいいような気もした。長寿というのはひどく厄介で、退屈な時間を紛らわせるためにどんなことでもさせる。新聞も性交も弾幕ごっこもそれらの遊びの範疇でしかない。

でも最近はとつくのとうにそんな遊びは通り過ぎたはずだった。誰かを殴ったり強姦したりなんていうのは、妖怪にとって一番手っ取り早い遊びで、ようやと多少知的な遊びに芽生えてきたというのが最近の妖怪の山のトレンドのはずだった。

「……詰まらない」

さらしをすつかりほどいてしまつてから、文はぽいと投げ捨てた。

「ああ、詰まらない。椀の裸は見飽きてしまった」

何が不満なのか分からない。文はそつとわたしの腹の上を撫でた。そこには赤紫色をしたみみず腫れが十字に走っていた。

「あれだけたくさん傷をつけてやったのに、これぐらいしか残らないなんて、生き物と
いうのは本当に度し難い」

傷は治るもので、治らないのは困る。わたしはそう言おうとした。それでも多分、例のあの文句だけが来るだろう。そう思つて言わなかった。わたしが応と言えば、文は否
と言うだろう。否と言われるのが嫌なら、何も言わないのがいい。

そつと鼻をくうんと鳴らして、血のまだしたたり落ちている右手の手首へすり寄つた。

一呼吸のうち一滴ほどのゆっくりとしたテンポで、赤い液滴はしたたり落ちていた。人間の目は便利だ。赤という色をはつきりと見ることが出来る。狼ではそうはいくまい。かといって四つ足で歩いていたらと、さかしげに二本の脚で歩くことでは、どちらが本当に良いかなど、とうてい決められまい。狼の方が、藪の中を早く駆けることが出来るのは言うまでもないことだし、いろいろと余計なことを考えなくてもすむのも確かだ。けれど二本脚であったなら、手が余っているから、誰かを殴ったり抱きしめたりすることが出来る。

どちらであっても、まあ、どうでもいいことだ。どちらでもあって、好きなときにどちらにもなれるというのは便利なことだ。したいようにすればよい。

鼻の頭が血で濡れてしまったのをぺろりと舐めた。そうして小さくあくびをした。わたしは空腹をこらえていた。生きているものは美味しい。食べると無くなってしまうのは悲しい。

覆い被さる文の体温は、僅かにわたしよりも低いけれど軟らかいのが服越しに分かる。そうであるということがどれだけの意味を持つかは分からない。我々にとっちはつきり

と分かっているのはいつだってファクトなのであって、意味や概念や理由や「べき」ということは、個々人の内側にあるだけのものになっている。

書くべきか書かざるべきか。

読むべきか読まざるべきか。

した方がいいのか、しない方がいいのか。

そんなことは誰にも判別できないことで、ただ書いた作品がそこにあつて、これからも生まれてくるだろうという事実が厳然とそこに存在している。

自動的にお話は生成されていく。そのための装置として、書く者がいる。そして、読まれなければそのお話は無かったことになる。そのための装置として読む者がいる。書く者も読む者も物語のための装置でしかない。

右手も左手も牙も脳髄も。

わたしたちを構成するすべての肉は物語の奴隷でしかない。

文はゆっくりと身を起こす。自分の右手を見る。気がつかないうちにその切り口からは新しい手のひらと指とが生成していた。

「……生えてしまった」

「なら書くしかありませんね」

「嫌です。そうしない方がいいのです」

文はそう言うなりまた、自分の右手へ口を付けた。がぶりと歯を立てて、ぶちぶちと喰い千切る。それを妨げるために、わたしは抱きしめようとするが、文はそうさせない。空いた左手でわたしの顔を押さえつけて、思い切り頭突きをする。脳天を揺さぶられて、痛みが閃光のように瞬く。

そうして、文は手首の上を汚く丸く食い破る。一つ一つの細かい骨の間、関節の軟骨を丁寧についばまれ、文の右手はまた切り離される。

「取ってこなくていいですから。駄犬めが」

文はそう言い置いて、その五指を備えた肉片を思い切り投げ捨てた。破れ窓の向こう側に広がるのは夕日。じきに夜闇が来るだろう。虫も鳴き始めている。涼しくなる。秋風が吹く。夜露に濡れた草の中に、手首はぼとりと落ちるだろう。闇を吸い込んで、血の赤色を少しずつ黒ずませながら、拾われるのを待つことだろう。

「うう、あう、う」

わたしは立ち上がる。殴られた鼻がひどく痛んで、しばらくは匂いが嗅げないかもしれない。頭がぐらぐらしている。脳しんとうを起こしてしまっているかもしれない。

「行かないで下さい。そばに居て欲しいのです」

「嫌ですよ。嘘つき鳥。わたしは、書いているあなたのことしか好きではないんです」

わたしは逃げ出すようにして、その破れた庵を転がり出る。脚がもつれてまっすぐ走ることが出来ない。沈みそうな夕日へ向けて森の中を走るわたしは、いつのまにかまたけものの体ていをしている。ふぐふぐと鼻を鳴らして、血のにおいのする吐息を弾ませて、下草の生い茂る獣道を駆けている。そうしてうろろうろしているうちに手のひらをまた拾うことができるだろう。そのようにしてまた文に右手を取り返してやることが出来るだろう。締め切りまでに書かせることが出来るかどうかは分からない。また文は右手をまた切り落として、書くことから逃げてしまうかもしれない。あるいはわたしを痛めつけて殺してしまうかもしれない。

あるいは、こういうことを繰り返しているうちに、また何かいいことがあって、書く

気持ちになるかもしれない。あるいは、文をわたしが飲み込んでしまつて、自分の内側の中の文に突き動かされるようにして、わたしが何か書く羽目になるかもしれない。あるいは、あるいは。

ここから先のたくさんの可能性を、どこかの誰かが見ていてくれて、それをきちんと整つた物語にしてくれるかもしれない。その方がいい。わたしは遠くを見ていたい。千里先の未来を読んでいたい。その未来は、ここではなくて明らかに、どこか遠くのあるところにあるのだ。幻想郷のどこかに。

こえう、くおう。

遠くで鳥が鳴いているのが分かる。大勢の鳥が泣いている。

おおう、るわお。

遠くで狼が吠えているのが分かる。群れをなす獣が呼ぼう。

わたしは痛む身体の節々をこらえながら、肉球で大地を踏みしめて山の中を急ぐ。日はじきに沈むだろう。沈んでも構うまい。地に伏す獣の目は闇の中でこそららんと輝く。夜こそがけだものの本番なのだ。明るさなどはほんの三日月ほどで構わない。明る

すぎる方が大切なものが見えなくなる。太陽などは沈んでしまえばいいのだ。羊歯の胞子にかび臭さを覚え、灌木の枝分かれの間に目を凝らす。赤い色を探す。血なまぐさい匂いを探す。新鮮な赤い薫染を探す。血は若いものをその香と痛みを以て教育するだろう。

わたしは目を光らせて、右手を探している。密やかに身を潜ませて、狩人になって、森の中に落ちているもみじのようにあどけない右手を探している。黒インキの染みついた、凄惨で暴力的な才能を探している。

2011.06.09.発刊の同人誌に寄稿したもの
執筆は 2010.10 月頃
i0-0i 名義にて発表